中務集注釈（二）

高野晴代・高野瀬恵子・森田直美
時田麻子・曾和由記子・佐藤千恵
武藤菜海・青木茉利絵

古今集歌人伊勢の娘、中務の家集を取り上げ、注釈を試みる。本稿では、本紀要前号「中務集注釈（一）」（一～五九番）に続き、六〇番歌～一一〇番歌を扱った。『中務集』は、二五〇首ほどの規模であるが、屏風歌、歌合歌、賀歌の公的な歌のほか、私的な贈答歌を収載する。公的な屏風歌であっても、そこには中務らしい、対象に優しい詠みぶりが見受けられる。本稿は、大学院演習および研究会での発表、討論において問題となった歌を中心に抜粋し、注釈を施した。

「中務集注釈（一）」について、様々な面からご教示を賜った皆様に深く感謝申し上げる。

各歌の文責を次に示す。六〇～六五、八五～九一番（森田）、六六～七〇、九二～九九番（高野瀬）、七一～七五、八一～八四（曾和）、七六～八〇（佐藤）、一〇〇～一〇三（武藤）、一〇四～一〇七（青木）、一〇八～一一〇（時田）。

凡例

一　本注釈は、資経本（冷泉家時雨亭文庫編『資経本私家集二』朝日新聞社二〇〇一年所収）を底本とする。

二　本文の校合に用いた本は、以下の通り（（　）内は、異同を掲出する際の略称）。

宮内庁書陵蔵本（510・12）（御）※原稿中では、御所本と称す。
西本願寺本（西）
前田家蔵 伝西行筆本（前）
奈良女子大学蔵本（歌）

三　和歌本文は読解の便のため、適宜仮名を漢字に、漢字を仮名に改めた。また、詞書内には必要に応じて句読点を施している。校訂した箇所や仮名漢字表記を改めた箇所は、右にルビで底本での表記を示した。

四　底本を校合本によって校訂した箇所は、［語釈］もしくは、［補説］に、その理由と共に明記した。

六〇番歌

朱雀院の若宮の御裳着の屏風の子日

小松原野辺にいづればともなはぬ春の霞もたちまじりけり

［異同］若宮の→なし（西）、屏風の→屏風の和歌（西）、いつれば→いつれど（西・前）

［他出］なし

［語釈］○朱雀院若宮の御裳着　朱雀天皇第一皇女・昌子内親王の裳着。昌子内親王は、天暦四（九五〇）年生まれ。その裳着は、『日本紀略』応和元（九六一）年十二月十七日条に記されており、昌子十三歳の折と分かる。また当屏風には中務の他、藤原朝忠、源順、清原元輔、壬生忠見、源信明が歌を詠進している。○春の霞も立ちまじりけり　「立ちまじり」の「立ち」は、「霞立つ」の意を響かせる。自然の景を擬人化し、「立ち交ってきた」とする詠みぶりは、底本十一番歌「ゆきまじりあまてる空もことよせて峰の霞も立ち出でにけり」と同趣。

［通釈］小松原が生い茂る野辺に出てみれば、伴って来たわけではない春の霞も立ちまじってきたことだ。

六一番歌

梅の花みる所

梅の花折る袂をもみつるかな香を尋ねてもしらんとぞ思ふ

［異同］みる所→みゆるところ（西）、をるたもと→にほふもと（前）、しらん→とはむ（西・前・歌）

［他出］信明集二一

［語釈］○当該歌作者について　［他出］に記したとおり、当歌は、信明集に同じ歌が収載されている。平野由紀子氏（『信明集注釈』貴重本刊行会二〇〇三年）は、昌子内親王の裳着の屏風の絵を推定し、その屏風歌を、現存する中務・朝忠・順・元輔・忠見・信明の家集によって対応させると、一つの題に一人が三首詠んだ例は見あたらないことから、当歌が信明作であることは不審とされている（信明集では十九～二一番歌までの三首が朱雀院若宮御裳着の「梅花」詠となっている）。従うべきか。○香を尋ねてもしらんとぞ思ふ　当該歌は、「月夜にはそれとも見えず梅花かをたづねてぞしるべかりける（古今・春・四〇　躬恒）」を踏まえたものと考えられる。

［通釈］梅の花を見ている所を

梅の花を折る、その袂をも見たことよ。袖に移った香をたずねても、あなたの居所を探し当てようと思います。

［補説］［他出］・［語釈］に記したとおり、信明集には当該歌が所収されているが、その詞書は「おなじ花折る女を男みる」である。これを参考にして考えると、この絵は梅を手折る女性を、男が見ているという構

図だったと考えられる。恋歌として考えた場合、結句は底本の「知らんとぞおもふ」よりも、西本願寺本・前田本の「とはむとぞおもふ」の方がより適切かとも思われる。しかし、語釈に挙げた躬恒の「香をたづねてもしるべかりける」を踏まえている可能性を考えると、「知らん」も捨て難い。また「とはむ」の場合、「たづねても」と意味的に重複することなどから考えても、「知る」の方が穏当と思われるため、ひとまず校訂は行わなかった。

六四番歌

神まつる所に卯花咲きたり
祈るをもきくたよりには卯の花の盛りをさへや神もうくらん

［異同］　ところに→ところ（西・前・歌）、さきたり→さけり（西）、いのるとも（「と」ミセケチ）→いのるとも（御）いのるをも（西・前・歌）、きこえしものを→きくたよりには（西・前・歌）、さかりをさえや→さかりをさへや（西・歌）かきねもぬさと（前）、神もうく覧→かみはみるらん（西・歌）かみやみるらん（前）

［他出］　なし

［語釈］　○神まつり　屏風歌の「神まつり（まつる）」は、四月と十一月のものがあり、四月は卯の花とともに詠まれることが多い。「まつる時さきもあふかな卯花はなほうぢ神の花にぞありける（貫之集・三四二）」など。○卯花～受く　「卯の花」と音を合わせて「憂き」「憂し」などと詠む例は、例えば「卯の花の憂しや我が身よほととぎすしばしも見せて鳴きつつも見む（躬恒集・四三五）」のように、中務以前にも多数見受けられる。当歌の「受く」もこれと同様に、音を重ねて表現したものだろう。ただし、同様の他例は見出しがたい。○神も　西本願寺本、歌仙家集本の「神は」を取りたいところだが、ここでは底本を尊重した。

［通釈］　神を祀る所に、卯の花が咲いている
　人々の祈りをも聞く際には、それを受け入れるだけでなく、木綿垂のような盛りと咲く卯の花までも、神も受けているのだろう。

［補説］　底本は、初句「いのるとも」の「と」をミセケチにしているが、正した仮名を記していない。御所本はそのまま「いのるとも」と写しているが、内容からすると西本願寺本・歌仙家集本の「いのるをも」が適当と思われるため、これに従って校訂した。また、第二句「きこえしものを」は、このままでは解釈が難しいため、他本により「聞くたよりには」と校訂。更に、第四句「さかりをさえや」も、現在の歴史的仮名遣いに従って、西本願寺本、歌仙家集本の「さかりをさへや」に校訂した。
　また、卯の花は、色や形状の共通性から、「卯花の色みえまがふゆふしでて今日こそ神を祈るべらなれ（貫之集・四三九）」「榊葉にゆふしでかけてやかつ神まつる垣根と見ゆる卯花（清輔集・六一）」のように、しばしば「幣」や「木綿垂」に見紛うものと詠まれている。当歌は校訂を施しても歌意の取りにくい歌だが、ここではこのような例を踏まえ、「木綿垂のような卯花を神が受ける」と解釈した。

六六番

遣り水に紅葉流る
もみぢ葉の散り積もりぬる滝水に秋の深さぞそこに見えける

［異同］　なかる→うきてなかる（西・前・歌）、もみちはの→もみちはも（前・歌）、たき水に→たにみつは（西）たにみつに（前）やり水（歌・異本注記）

［他出］　信明集二三

［語釈］　○滝水に　他本は「谷水は」又は「谷水に」とする。「たき」は、古くは急流、早瀬の意であるが、平安時代以降は落差のある所から落ちる水の意に使用されるようになった。「亀の尾の山のいはねをとめておつるたきの白玉千世のかずかも（古今・賀・三五〇　紀惟岳）」。［補説］参照。　○そこに　「そこ」は「底」に「其処」を響かせて、滝の底に紅葉が集まっているその様子から、の意か。［補説］参照。

［通釈］　遣り水に紅葉が流れるところ

紅葉葉が散り積もってしまう滝水に、秋の深まりが、滝の底の紅葉葉の様子から見て取れることだ。

［補説］当該歌は、六一番歌同様、中務の作かそれとも信明の歌か、或いは極めてよく似た歌を互いに詠んだと考えるべきか、が問題になる。『信明集』のほうでは、

たきおちたるこころ

紅葉葉のおちそはりぬる滝つせは秋のふかさぞそこにみえける　（二二三）

とある。こちらは詞書に「滝」がある代わりに、「遣り水」という言葉は無く、また詞書からでは紅葉の歌とわからない。歌は、二、三句が「おちそはりぬる滝つせは」で、多少異なるものの、下の句は当該歌と全く同じであり、一首全体として、同一歌の異同と見なしてもよい程度の違いである。仮に、当該歌と『信明集』の歌とを別個のものと見た場合、当該歌では滝に紅葉が散り積もることが強調されるのに対し、『信明集』歌では、遣り水の早瀬に紅葉の葉が落ち加わっているものの、水底に紅葉があるのか否かははっきりしない。『信明集』でも、「朱雀院の若宮の御裳着」の屏風歌として、『中務集』同様に「初雁」の次に置かれ、紅葉の歌はこれのみであることから、同一の歌と見る場合には、二人のどちらの詠作かを考察する手がかりも無い。強いて言うならば、詞書はともかく、歌は『信明集』のほうが難が少ないと言えよう。

また、西本願寺本・前田本では、当該歌の第三句で「たき」を「谷」とするが、『信明集』では詞書と歌の両方に「滝」「たぎつ瀬」があるところから、「滝」のほうが蓋然性が高いと考えられる。ただ、「滝の水」ではなく「滝水」という表現は、当該歌の他には院政期の歌（小侍従）まで見られず、これとは逆に、「谷水」は躬恒や伊勢の先行例も同時代の例もある。そこで、歌語としての用例の多寡を問題にするならば、「谷水」のほうが穏当という考え方も出来るが、それでは詞書の「遣り水」を谷川と見立てたことになり、その必然性も少し問題になるだろう。「遣り水」を谷川に見立てるよりも、「遣り水」で作られた「滝」を詠むほうが、より自然かと思われるからである。例えば、中務の母伊勢の歌に、

権中納言敦忠が西坂本の山庄のたきの岩にかきつけ侍りける

伊勢

おとは河せきいれておとすたきつせに人の心の見えもするかな　（拾遺・雑上・四四五）

があるが、この歌の『伊勢集』（四六八番）詞書では、「ある大納言（ママ）、比叡坂本に、音羽といふ山のふもとに、いとをかしき家つくりたりけるに、音羽川をやり水にせきいれて滝おとしなどしたるをみて、やり水のつらなるいしにかきつく」とあって、「せき入れて落とす」とは、川から遣り水として引いた水を滝を作って落とすことと確かめることが出来る。

従って、当該歌も、中務、信明のどちらの詠作であっても、「遣り水の滝に紅葉が散る」情景を詠んだものと考えられよう。

もっとも、当該歌の場合、三句は「滝水は」とありたいところである。散った紅葉が流れる遣り水の滝では、秋の深まりが水底に集まったその紅葉に見て取れる、と言いたいのであろうが、ここでは底本どおり「滝水に」のままで解した。

六九番

御屏風の絵に塩焼く海人

よとともに塩を焼きつつ誰がために火にも水にも入れる我が身ぞ

［異同］御屏風のゑにしほやくあま→詞書なし（西・前・歌）、しほを→もしほ（西・前・歌）、たかために→たかためか（西・前・歌）

［他出］なし

［語釈］○御屏風　何時、どの折のものか未詳。　○よとともに　①世と共に　常々。絶えず。始終。「住の江の浪にはあらねどよとともに心を君によせわたるかな（古今集・恋二・六三八　貫之）」　②夜と共に夜通し。一晩中。夜もすがら。「夜とともにたまちるとこのすがまくらみせばや人に夜はのけしきを（金葉集三奏本・恋・三七〇　俊頼）」。ここでは①の意で解した。

［通釈］御屏風の絵に、塩を焼く海人

絶えず塩を焼き塩を焼きして、いったい誰のために、火にも水にも入る我が身なのか。

［補説］「塩焼く海人」の光景は、月次屏風等の須磨浦のものとして詠まれるほか、次のように、多く恋歌として詠まれる。

須磨のあまの塩焼く煙風をいたみおもはぬ方にたなびきにけり

（古今・恋四・七〇八　よみ人しらず）

須磨のあまの塩焼き衣をさをあらみまどほにあれや君がきまさぬ

（同右・恋五・七五八　同右）

この傾向は絵を詠む場合にも波及したようである。

歌絵に、あまの塩焼くかたをかきて、こり積みたる投げ木のもとにかきて、かへしやる

四方の海に塩焼くあまの心から焼くとはかかるなげきをやつむ

（紫式部集・三〇）

また、「よとともに」も「火にも水にも」も、恋歌に用いられることの多い表現である。

世とともに流れてぞ行く涙河冬もこほらぬみなわなりけり

（古今・恋二・五七三　貫之）

世とともにあぶくま河のとほければそこなる影をみぬぞわびしき

（後撰・恋一・五二〇　よみ人しらず）

吾背子波　物莫念　事之有者　火尓毛水尓毛　吾莫七国

（万葉集・巻四・五〇六　阿倍郎女）

『万葉集』五〇六番歌は、『古今六帖』にも採録されている（二九五六番）ので、人口に膾炙した表現なのであろう。つまり、当該歌は、画中の海人の立場で、恋歌として詠まれていると言ってよいであろう。ただし、塩焼きを詠む屏風歌がみな恋歌というわけではないのは、次の能宣の歌でも知られる。

須磨の浦のもしほの煙春なればうらに霞のなほやたつらむ

（能宣集・八二）

七〇番

松の下に水流る

いにしへの心も絶えず行く水にわがまつ影も今日こそは見れ

［異同］　水なかる→みつやれり（西）、たえす→たはみ（前）、やくしほかまの…→わかまつかけも今日こそはみれ（西・前・歌）

［他出］　伊勢集七七、古今六帖二九二四（作者・伊勢）

［語釈］　○松の下に水流る　『伊勢集』では「きたの宮の御もたてまつるに、かむのおとどの御送物の御屏風歌、ここにたてまつりたまふかぎり」の詞書で、絵柄の説明無く当該歌を置く。また、松の下に水や泉がある景を詠む例は『貫之集』（一七九番）や『大嘗会和歌（寛治元年）』にも見られる。これは『蒙牛』の「許由一瓢」等と関わるものか。［補説］参照。　○いにしへの心　木船『注釈』は「かつての愛情」と注する。「いにしへの心はなくや成りにけんたのめしことのたえてとしふる（後撰集・恋六・一〇〇三　よみ人しらず）」。しかし、「いにしへの心」の恋歌における用例は少ない上に、「いにしへの」で始まる歌には、「野中の清水」や「水の心」が詠まれることが目立つ。「いにしへの野中のし水ぬるけれど本の心をしる人ぞくむ（古今集・雑上・八八七　よみ人しらず）」。［補説］参照。　○わがまつ影も　下の句は他本及び他出により校訂した。「まつ」は「松」と「待つ」の掛詞。「いつしかとわが松山に今はとてこゆなる浪にぬるる袖かな（後撰・恋一・五二二　よみ人しらず）」。　○見れ　『古今六帖』では「見め」、すなわち「見る」の已然形でなく「見＋め（「む」の已然形）」としている。その場合、「見るだろう」或いは「見たい」の意となる。

［通釈］　松の下に水が流れる

昔の清らかな心も絶えることなく流れゆく水に、私の待つ松の姿、すなわちあなた様のお姿を、今日こそは見ることだ。

［補説1］　当該歌は『伊勢集』及び『古今六帖』（五・昔ある人）によれば、伊勢の作となる。しかし、問題点が無いわけでもない。［語釈］に示した『伊勢集』七七番詞書は、康子内親王（「中務集注釈（一）」の四八番歌注釈参照）の裳着（承平三（九三三）年八月二十日）の際に、尚侍藤原満子が贈った御屏風のための歌として、奉ったのを全部書き記すという意であろうが、「ここに奉りたまふ」とは具体的にはどのようなことか、必ずしも明確ではない。尚侍満子は、内親王の父醍醐天皇の叔母にあたり、この裳着に奉仕した時点で六十一歳。当該歌はこの満子の心を汲んでの歌、ということになるのであろう。ただ、『伊勢集』では、この後に次のような歌が続く。

浮き草、舟にてとるところ

根をたえて水にとまれる浮き草は池の深さをたのむなりけり

（伊勢集・七八）

女郎花をりたるところ

をみなへしみるに心はなぐさまでいとどむかしの秋ぞこひしき

（同・七九）

狩りする人、田舎家の田などある、ま近くより来たれば

狩りに来といふに心の見えぬればわがたもとにはよせじとぞ思ふ

（同・八〇）

神楽するところ

としごとに神をぞ祈る榊葉の色も変はらでをらんと思へば

（同・八一）

これらの歌も、七七番詞書にある康子内親王裳着の屏風歌と考えられる。このうち、七八番歌は『古今六帖』巻六・三八三五番にも作者を伊勢として見え、作者問題は無い。しかし、七九番歌は『古今六帖』巻五・二九〇八番に見えるほか、『和漢朗詠集』秋・二八一番と『新古今集』哀傷・七八二番に、作者を清慎公実頼として見える。次の八〇番歌は、二句が「いふに」でなく「きくに」となった形で『金玉集』二七番に作者を伊勢として見えるが、同じ形で『敦忠集』末尾（一四五番）に見え、更に『三十六人撰』『三十人撰』『深窓秘抄』でも敦忠の歌として採られている。八一番歌は、『古今六帖』巻一・二二七番（作者・伊勢）として見えるが、『中務集』にも見える（西・前・歌本六四番、底・御本八一番）。このように、『伊勢集』七七～八一番は作者に異伝のある歌が多く、その点で、当該歌と八一番歌が中務の詠である可能性も否定できない。

もっとも、底本（及び御所本）の『中務集』（二類本）にも、問題がある。当該歌の場合、西本願寺本系（一類本）六一番歌の下の句が下の句になっており、その一類本六一番歌の上の句は二類本には無い。これと同様の問題箇所がもう一つあり、その関係を西本願寺本をベースにして示すと、次のようになる。☆は当該歌を示し、★は二類本に無い歌を示す。

〔一類本〕

御屏風、いけのほとりのやなぎ

六〇　みなそこにかげのうつれるあをやぎはなみのよりけるかげとこそ
　　みれ

★六一　うらちかくたちつるはるのかすみともやそしほがまのけぶりと
　　ぞみる

六二　よとともにもしほやきつつたがためか火にもみづにもいれるわが
　　身ぞ　　↓二類本・六九番

六三　うのはなのさかりにのみやまざとのかきねもしろく人のみるらん
　　かぐら

六四　としごとに神をぞいのるさかきばのいろもかはらでをらんとおも
　　へば　　↓二類本・八一番　『伊勢集』八一番

（二首略）

　　まつのしたにみづやれり

☆六七　いにしへのこころもたえずゆくみづにわがまつかげも今日こそ
　　はみれ

　　坊城の右のおほいとのの五十賀中宮したまふ、村上の先帝の
　　めしたる、紅梅

六八　ふくかぜにほひかはらぬむめのはなたがそめいでしいろにかあ
　　るらん　　↓二類本・八五番（詞書は同内容）

　　子の日

六九　みなそこのいろさへかはるこまつばらちとせちよそふのべにきに
　　けり　　↓二類本・八六番　この下句なし

（三首略）

★七三　さみだれのよもあけがたになげくかなものおもふことやあきと
　　なるらん

★七四　さはみづにかげのかたぶくあをやぎはかはづのこゑをあはれと
　　やきく

七五　やまぶきのはなのさかりはかはづなくゐでにやはるのたちとまるらん

七六　しらなみのをるかとみえてをちかたのきしのまにまにさけるうのはな

★七七　かたをかのみかきのはらのうぐひすははなちりぬとやねをばなくらむ

この現象には、原因として二類本の書写の際の目移りや丁の飛ばし等が考えられるが、「としごとに」の歌が二類本でも『伊勢集』でも同じ八一番歌なのは偶然なのか、当該歌の位置と併せて、興味深い。

[補説2]「水のほとりの松」の歌は少なくないが、当該歌は「松の下に水流る」情景を詠んだものであり、一般的な水辺の松の歌とは若干異なるように思われる。[語釈]に示したように「松の下の水（泉）」を詠んだとする歌は他にもあり、「水辺の松」と「松の下の水（泉）」の二つは、区別して考えたほうが良いのではないだろうか。まず、『貫之集』に見る例。

松のもとより泉のながれたる所

松の根にいづる泉の水なれば同じきものをたえじとぞ思ふ

（貫之集・一七九）

「延長四年きよつらの民部卿六十賀（同・一七三番詞書）」の一首である。絵は松の根元から泉が流れ出るさまを描いていたものと考えられる。次いで『大嘗会和歌』寛治元（一〇八七）年十一月二日（堀河天皇大嘗会）の例。「悠紀方」の歌は大江匡房、「主基方」は藤原行家による。

（悠紀方）小松原下有流水其間有納涼人

小松原　志太由久水乃　須須之支爾　千年乃影遠　掬比津流加那

（五四二）

（主基方）晩夏　松井有掬水遊興之人

いはひつつまつ井の水をむすびあげてときはのかげに遊ぶ楽しさ

（五七〇）

主基方の歌の「松井の水を掬」ぶとは、松の傍らの泉の水を掬う意であろう。『蒙牛和歌』所載の「許由一瓢」に拠れば、伝説の賢人・許由は箕山に籠居していたが、帝堯に天下を譲ろうと言われた際、いやな事を聞いたと潁川で耳を洗ったと言う。また、箕山では松の下の泉の水を手で掬って飲んだので、これを見た人が許由に瓢を贈ったが、梢に掛けたその瓢が風に鳴るのを煩わしがって打ち破って捨てた、とされている。「松の下の水」は、この許由の故事と関わる絵柄ではないだろうか。

なお、[語釈]で指摘したように、木船『注釈』はこの歌を恋歌ふうに解しているが、それは前の歌（六九番歌「よとともに」）に引きずられた結果であろう。

七四番歌

藤に

うとからで掛かれる藤は花ながら松に心は違はざらなん

[異同]　藤に→御屏風まつにふちかゝれり（西）御屏風にまつに藤かゝれり（歌）、うとからて→いとかゝて（歌）、花なから→しなしから（歌）、たかはさらなん→たかはさりけり（歌）

[他出]　なし

[語釈]　○松にかかれる藤　『古今集』以降よく詠まれるようになった景で「緑なる松にかかれる藤なれどおのがころとぞ花は咲きける（貫之

集・五〇）」や「藤波のかかれる岸の松はおひて若紫にいかでさくらん（順集・二一五）」などがある。特に算賀や祝言の性格を有する屏風歌では、千歳を寿ぐ松とともに藤を詠むパターンは多く、この組み合わせは不動のものとなる。○うとからで　疎遠でない、親しみ馴染んで、の意。「うとからぬ名もあるものを妹背山たちな隠しそ春の霞も（長能集一四五）」など、「うとからぬ」「うとからず」は例が見える。○松に心は違はざらなん　「松に心は背かないで欲しい。」の意で、恋愛的要素を含んでいる。

［通釈］藤に

親しみ馴染んで掛かっている藤は、花ながらも、松に心は背かないで欲しい。

［補説］七一番歌の詞書に「また異屏風」とあり八一番まで一連の屏風歌が続く。当該歌もそのうちの一首。底本と御所本では、竹・柳・藤・桜・卯花・郭公・六月祓・女郎花・神楽というように、おおよそ季節ごとに歌が並ぶ。しかし、他本では配列が大きく異なっており、同時詠の屏風歌なのか、または別々の屏風歌を取り集めて一つの月次屏風のように並べたのか詳細は分からない。

七五番歌

又、さくら

あかざらば千代までかざせ桜花はなも変はらじ春もたえねば

［異同］又→なし（西・前・歌）うめ（歌）、あさからて→あさからは（西・前）あかさらは（歌）、ちよまてかはせ→ちとせまてさけ（前）千世まてかさせ（西・歌）、さくらはな→梅の花（歌）、かはらし→かはらて（歌）、たえねは→たえすは（西・前・歌）

［他出］元輔集二二九（桂宮本丙本　第三句「桃の花」）・後拾遺集巻二・春下・一二九（作者元輔　第三句「桃の花」）

［語釈］○あかざらば　底本「あさからで」では意味が取りにくいため歌仙家集本に従い校訂した。見飽きないのなら、の意。「朝月日向黄楊櫛　雖旧　何然公　見不飽（万葉集・巻十一・二五〇〇・読人不知）」、「とことはになくとも人やあかざらむさてこころみよ山郭公（千五百番歌合・七九五・兼宗）」のように「あかざらん」などはわずかに見られるが、「あかざらば」のような、仮定表現は他に例が確認できない。また、否定の言葉が初句にくるものは珍しい。○かざせ　底本「かはせ」では意味が取りにくいため、西本願寺本により校訂した。「かざす」は草木の花や枝葉を頭髪や冠に挿すことで、草木の生命力にあやかり長寿を祈る。

［通釈］又、さくら

見飽きることがないのなら、桜の花を千年までもかざしなさい。花も変わることはあるまい。春も絶えることはないのだから。

［補説］当該歌は『元輔集』（桂宮本丙本）にも採録されているが、この歌を含む巻末四七首の屏風歌は古歌を集めて月次の屏風の順序に並べた屏風歌群である。（後藤祥子「清原元輔詩論―屏風と歌合と―」国語国文論究　昭四六・二）。そのため、元輔ではなく中務の作と考えられる。他出の『後拾遺和歌集』で元輔作となったのは桂宮丙本系統『元輔集』を資料としたためであろう。

『後拾遺集』の詞書が「天暦御時御屏風」であるのが何に拠るのか明らかではないが、『後拾遺集』では他に三一四・三二七・三五七・四一五

の元輔歌を「天暦の御時の御屏風」として入集しているため、混同された可能性もある。

また、底本の第三句は「桜花」であるが、歌仙家集本では「梅の花」、『元輔集』では「桃の花」である。桜・梅・桃はいずれも「かざす花」として歌に詠まれているため、書写する過程で本文に違いが出たのであろう。

なお、もし当初から『元輔集』のように「桃の花」を詠んだ歌であった場合、桃は「百」という名を含み持つ花であるので、第二句「千代までかざせ」および第四句「はなも変はらじ」との繋がりが良い。

七八番歌

六月祓する所

君がため祈る心はみなかみも流るるごとく今日や知るらん

[異同] 心はみなかみも→心をみしかみも（歌）

[他出] なし

[語釈] ○六月祓　名越しの祓とも。毎年六月晦日に、宮中および各神社で行なわれる。○みなかみも　「水上も」と「皆神も」の掛詞。

[通釈] 六月祓する所

あなたのために祈る心は、水上で水が流れるようにはやく、神は皆、今日にも知って下さることだろうか。

[補説] 「みなかみ」を掛詞とした面白い例としては、「落ちたぎつ滝のみなかみ年積もり老いにけらしな黒き筋なし（古今・雑上・九二八　忠岑）」などが挙げられる。これは「水上」を「皆髪」に掛け、「水上は、長い年月流れて皆老いてしまったので、滝の流れは白く、黒い筋がないのだ」としたもの。当該の中務歌と同じく、「水上」を「皆神」と掛ける前例としては、伊勢の「みなかみとむべもいひけり雲居より落ち来るかとも見ゆる滝かな（伊勢集・六七）」などがある。また同時代にも、「みなかみも聞きて忘るな禊する今日の河辺に契ることのは（能宣集・三三）」などが確認できる。また、『和漢朗詠集』には、中務の作として「みなかみの定めてければ君がよに再び澄める堀河の水（五二〇）」があるが、『中務集』諸本に、この歌は所収されていない。

八〇番歌

前栽植うる家

露をだにおとさで堀りつ女郎花植ゑばいづれの秋か見ざらむ

[異同] せんさい→せさい（歌）、うふるいえ→うゑたるところ（西前）うへたるいへ（歌）、露をたに→つゆはみな（前）、ほとさで→おとさで（御・前・歌）もらさて（西）、ほりつ→折つ（歌）

[他出] なし

[語釈] ○いづれの秋　天暦期には、「よろづ世に変はらぬ花の色なればいづれの秋か君が見ざらん（拾遺・賀・二九四　藤原実頼）」「今年より植ゑはじめつる我が宿の花はいづれの秋か見ざらん（後拾遺・秋上・三二七　元輔）」など、前栽を題材とし、「いづれの秋かみざらん」とする例が確認できる。特にこの二首は、当歌との影響関係が考えられるが、その前後関係は定かでない。

[通釈] 前栽を植えている家

露さえも落とさずに掘ったことだ。この女郎花を前栽に植えれば、いったいどの秋に見ないことがありましょうか。永久に見ることができるでしょう。

［補説］　詞書は、底本では「前栽うふる家」とあるが、現在の歴史的仮名遣いにより「ううる」と校訂する。第二句「ほとさで」は、このままでは意味が取れないため、前田家本に従い「おとさで」と校訂する。

さて、当該歌は詞書を「前栽植うる家」とし、花の指定もないが、歌の中心は、野の女郎花を移植することにある。これは、中務と同時代私家集の詞書に、「嵯峨野に前栽掘るとて（元真集・一三三）」「蔵人所の男ども、御前の前栽掘りに嵯峨野にまかりたりしに（能宣集・六七）」などとあるような、嵯峨野での前栽掘りを想定しての詠だろう。前栽に植えられる植物は、「人の前栽に、菊に結びつけて植ゑける歌（古今・秋下・二六八　業平）」「前栽に紅梅を植ゑて、又の春遅く咲きければ（後撰・春上・一七　兼輔）」といった例が示すように、菊や梅などさまざまである。しかし、嵯峨野から移植される花としては、「女郎花我が掘りつれば秋の野にいとどや鳴かむつま恋ふる鹿（能宣集・二二三）」「日暮らしに見れどもあかず女郎花野辺にや今宵旅寝しなまし（拾遺・秋・一六一　長能）」のように、もっぱら女郎花が詠まれている。

八三番歌

なでしこ

初花（はつはな）とみてこそしのべ白露の置（を）きて残（のこ）れるなでしこの花

［異同］　なし（底本・御所本のみの所収歌）

［他出］　朝忠集四九

［語釈］　○詞書　八二番歌の詞書に「若宮の御もぎをかきをとしける」とあり、八四番までの三首がその屏風歌である。これらは、底本六〇番から六八番までの「朱雀院の若宮の御裳着の屏風」歌群と同時詠であり、本来、一緒に並べるべきものを書き落としたものである。○なでしこ　ナデシコ科の多年草。山野に自生し、淡紅色の花が咲くカワラナデシコがその代表ともいうべきもの。『万葉集』にもよく詠まれ、二六首が数えられる。当時は夏の終わりから秋にかけて咲く花と認識されていた。平安時代に入り、異名の「とこなつ」も使われるようになると、しだいに夏の花としてのイメージが強くなる。また、共寝をする意を掛けて用いられたり、夜の花として「露けき」花としても詠まれた。○初花　その季節になって初めて咲いた花。裳着を意識した表現。○しのぶ　賞美する。めで、賞する。

［通釈］　なでしこ

初花とみてこそ愛おしみます。白露が置いて、秋まで残って咲いたなでしこの花を。

［補説］　当該歌は『朝忠集』（四九番歌）にも採録されている。本文は次の通りである。

なでしこの花ひらけたるをもてあそぶ

はつはなをみてこそしのべ白露のおきてのこせるなでしこの花

当該歌と比較すると、朝忠歌は第一句が「はつはなを」、第四句が「おきてのこせる」であり、本文の異同がみられる。

朝忠歌では、格助詞の「を」によって見る対象を「はつはな」と示し、第四句が「残る」の他動詞「残す」であることで、「白露が置いて花を留めている」という意になろう。「置きて残せる」という表現は他にも

いくつかみられる。

黄菊残れり

君がため心もしるく初霜の置きて残せる菊にざりける

（躬恒集・一七）

またの年の十月に、同じ大納言の家に残れる菊を惜しみ侍りしに読みて侍る

長きよの星かともみむ初霜の置きて残せる白菊の花

（元輔集（書陵部蔵甲本）・一四）

十月

草枯れの冬まで見よと露霜の置きて残せる白菊の花

（好忠集・二八三）

これらも露や霜が花を留めている意である。右記の三首はいずれも「残菊」を詠んだものであるため、「露・霜が菊を残す」という表現に矛盾がない。しかし、朝忠歌では「露が初花を残す」となるため表現に矛盾が感じられる。

なでしこは夏の終わりから秋にかけて咲く花である。当該歌のとおり、秋になって咲いて、花に白露を置いて美しく匂っているなでしこを愛おしむ、と解釈したほうが御裳着の屏風の歌としては相応しいであろう。

八四番歌

菊を

我宿の菊の白露けふごとにいくよたまりて淵となるらん

［異同］　なし（底本・御所本のみの所収歌）

［他出］　元輔集一四七・拾遺集一八四（作者元輔）・和漢朗詠集二六五（作者中務）・三十人撰一二三（作者中務　初句「ももしきの」）三十六人撰一四七（作者中務）・奥儀抄二五四・和歌色葉三五三・定家八代抄四二五

［語釈］　○菊　秋の景物とされるが、残菊は初冬のものとしても詠まれる。『懐風藻』の漢詩には詠まれているが、『万葉集』には見いだされない。『寛平菊合』以後、秋の歌題として、主要なものとなった。中国の菊水の故事を背景として、菊の露を不老長寿を約束するものとして詠むものや、菊の芳香を歌った歌などがある。本家集にも、当該歌以外で菊を詠んだ歌に「おいにける身にがしるしも白菊の露のなたてになりぬべきかな（二七）」などがある。　○淵となるらん　上流の菊の雫が落ちて人々に長寿を授ける川水になったという、中国酈県甘谷の故事を踏まえた表現。当該歌以前でこの故事を踏まえた屏風歌には、貫之の「水にさへながれて深きわがやどは菊のふちとぞ成りぬべらなる（貫之集・五四二）」がある。

［通釈］　菊を

我家の菊の白露は、日々溜まり続け、どれほどの年月溜まって深い淵となるのだろうか。

［補説］　底本では第五句が「淵となるらし」である。しかし助動詞「らし」は確認している根拠に基づいて推量する意を表すため内容に合わない。他出で示した歌は、いづれも第五句が確認できない事柄の推量を表す「らん」を用いた本文である。当該歌の本文もそれに従って「淵となるらん」に校訂した。

さて、［他出］を見ても分かるように作者が中務か元輔かの問題がある。『和漢朗詠集』・『三十人撰』・『三十六人撰』は中務とし、『元輔集』・

『拾遺和歌集』は元輔である。それぞれの本文を比較すると、第四句・第五句に異同がある。当該歌・『和漢朗詠集』・『三十人撰』は第四句が「いくよたまりて」、その他は「いくよつもりて」である。更に、『元輔集』歌仙家集本は「つもりて」だが、尊経閣文庫蔵本は「たまりて」である。第四句の違いは、主語を菊に置いた露に置くか、または「いくよ」に置くかによる。

「露・たまる」という表現を使った例では次のようなものがある。

あきのはじめになれるけしきは
るりのつぼささらぬさきは蓮葉にたまれる露にさも似たるかな
（好忠集・五四五）

家集　述懐　古来歌合　　和泉式部
かくしつつ在りふる程に身の露やたまりてしづむ淵となるらん
（夫木・巻第十三・秋部四・五四八五）

また、「露・つもる」という例は時代が少し下るが次のようである。

百首歌中に祝の心をよめる　　源俊頼朝臣
きみが代は松のうはばにおく露のつもりてよもの海となるまで
（金葉集（二度本）・巻第五・賀歌・三一一）

表現としてはどちらもみられるものであり、したがって、異同によって作者をどちらかに断定できるような根拠が今は見あたらない。

八五番歌

坊城殿五十賀、中宮のしたまふに、村上先王のおほせにて召し（給）しかば、屏風の料（れう）

吹く風（かぜ）ににほひかはらぬ梅（むめ）の花たがそめかけし色にかあるらん（覧）

［異同］　坊城殿→坊城の右のおほいとの、（西）いとうの右大臣との（前）ほう上の右大臣殿（歌）、五十賀→御賀（歌）、中宮し給に→になし（西）、村上先王→村上の先帝（西・歌）、めし、かは→めしたる（西）めしける（前）めすに（歌）、屏風のれう→紅梅（西・前・歌）

［他出］　なし

［語釈］　○坊城殿　藤原師輔。関白忠平の次男。同母弟に師氏、師尹がおり、異母兄に実頼がいた。承平元（九三一）年に蔵人頭、同五年には参議に任ぜられ、右大臣正二位に至る。天徳四（九六〇）年五月に薨去。家集『師輔集』、日記『九暦』があり、また父忠平より受けついだ儀式作法書『九条年中暦』を遺す。その五十賀の様子は、『日本紀略』天徳元（九五七）年四月二十二日条に詳述されており、女御安子の藤壺において、盛大に催されたことが知られる。○中宮　藤原安子。村上天皇皇后、冷泉、円融天皇の母。○村上先王　村上天皇は、師輔五十賀が行われた天徳元年には在位中。「先王」とは、『中務集』編纂時においてのことであろう。

［通釈］　坊城殿の五十賀を、中宮がなさるに、村上先帝の仰せでお召しがあったので、屏風の料を
吹く風に色つやが変わらない梅の花は、一体誰が染めかけた色なのだろうか。

［補説］　当屏風には、中務の他、藤原元真、大中臣頼基、藤原清正、平兼盛、小野好古、清原元輔が料歌を献じたと考えられている。しかし、同時屏風詠の可能性を指摘されてきたこれらの歌人の歌が、全て確実に、師輔五十賀屏風歌であるとは断言できない。例えば、藤田一尊氏は

『蜻蛉日記』〈小一条左大臣五十賀の屏風歌〉に関する一考察―『元輔集』との関連から」（『大東文化大学日本文学論集』昭六二）、及び「『蜻蛉日記』〈小一条左大臣五十賀の屏風歌〉再説―『元輔集』との関連と屏風歌の制作法について」（『大東文化大学日本文学論集』昭六三）において、『蜻蛉日記』に記される安和二年の小一条院師尹五十賀屏風の八つの図柄が、従来師輔五十賀屏風歌とされてきた元輔集歌に符号することなどから、これは師輔ではなく、師尹の賀で詠まれたものではないかと指摘されている。

また、中務についても、底本八五～九一番歌の全てを、師輔五十賀屏風歌と認めるか否か、疑問を呈する向きもある。山本令子氏（「藤原師輔五十賀屏風に関する一考察」（『三田国文』平八・十二）は、『元真集』の当該屏風歌との内容や、想定される図柄の比較から、『中務集』で、師輔五十賀歌と認められるのは、底本八五・八六番歌のみではないかと論じられた。しかし、『元真集』に師輔五十賀歌と称して載せられている歌を基点とし、それに合致するか齟齬するかによって、他の私家集歌が同時屏風詠か否かを判断した山本氏の論も、即座には首肯しがたい面があり、なお検討を要する。

八六番歌

子日水のほとりの松

水底の色さへかはる小松原千歳千代そふ野辺にきにけり

［異同］ みつのほとりの松→なし（西）、はなちりぬとやねをはなくらん→ちとせちよそふのへにきにけり（西・前）ちとせちよそふ〈第四句なし〉（歌）

［他出］ なし

［語釈］ ○下句　底本では、下句は「はなちりぬとやねをはなくらん」だが、他本により改めた。詳しくは［補説］。○千歳千代そふ　松と「千歳」、または、松と「千代」を一首に詠み込む例は多くあるが、「千歳千代」と重ねる表現は、他例を見出せない。当歌の場合、松そのものと、水に映る松とで、その永久さも倍増するという発想から、「千歳」と「千代」を重ねたか。

［通釈］ 子日、水のほとりの松

水底の色までも変わるほど、緑色に茂る小松原。千歳と千代が寄り添い、永久に栄える野辺にやってきたことだ。

［補説］ ［語釈］に記したとおり、下句は底本の「花散りぬとやねをば鳴くらん」では、歌意が取り難く、西本願寺本により校訂した。

西本願寺本七七番（坊城殿五十賀屏風歌の一）に、

片岡の御垣の原のうぐひすは花ちりぬとやねをばなくらむ

があるが、底本にこの歌はない。よって、底本までの伝写過程で、当該歌の上句の後に目移りや錯簡などの原因によって、西本願寺本七七番歌の下句が誤写されたと考えられる。底本の歌数が、西本願寺本・前田家本に比べ三首少ないのは、この誤写が関係しているか。ちなみに、前掲「かたをかの」歌を除き、西本願寺・前田家本にあり、底本にない歌は次の二首。

五月雨の夜も明け方に嘆くかなもの思ふことやあきとなるらん　（西本願寺本・七二）

沢水に影の傾く青柳は河辺の声をあはれとやきく　（同・七四）

九一番歌

又卯花

白浪のよるかとみえて遠方のきしのまに〳〵咲ける卯の花

［異同］詞書なし（西）、よるかと→をるかと（西・前）おる（歌）、すゑ→きし（西・前）

［他出］なし

［語釈］○きしのまに〳〵　底本「すゑのまに〳〵」を西本願寺本により改めた。詳しくは［補説］。○卯花と浪　卯の花が浪に見立てられる例は、「卯の花の咲ける垣根はみちのくのまがきの島の浪かとぞみる（拾遺・夏・九○　よみ人しらず）」などが挙げられる。

［通釈］又卯の花

白波が飛沫をあげて寄るかと見えて、それは、遠方の岸に沿って咲いている卯の花であったよ。

［補説］第四句は、底本では「すゑのまにまに」とある。これで歌意を取ると、「梢に沿って」もしくは、「山頂に沿って」となろうか。しかしいずれもやはり言葉が足りず、また「すゑ」と「まにまに」という表現が、一首に同時に詠み込まれる他例も確認できない。西本願寺本「岸」ならば、「岸のまにまに」という表現は、例えば

住江の岸のまにまに昔よりかみやかはらぬ松や植ゑけむ　（躬恒集・三六）

色深き岸のまにまに咲ける花あさき浪には折られざりけり　（順集・二四九）

など、散見する。

底本はおそらく、伝写過程で、「支」を字母とする「き」と、「志」を字母とする「し」が、「すゑ」と語写されたと推測される。よって、西本願寺本により改めた。

九四番

戀

君恋ふる心はそらに天の原かひなくてゆく月日なりけり

［異同］そら→そこ（御）（底本・御所本のみの所収歌）

［他出］天徳内裏歌合三五（作者・中務）、金葉三奏本三六三（作者・中務）、兼盛集一〇〇

［語釈］○心はそらに　底本「こゝろのそらは」。他資料により校訂。「そら」は掛詞的用法で、「うわのそら」の意を表すとともに、「空」として「天の原」を導く。［補説］参照。○かひなくて　「かひ」は「甲斐」と「櫂」の掛詞も考えられるか。［補説］参照。

［通釈］恋

あなたを恋う私の心は浮き立って落ち着かない状態なのに、思う甲斐もなく過ぎて行く月日であることだ。

［補説］天徳四年三月三十日の内裏歌合における中務詠の一首。この歌合は、題が「霞・鶯・柳・桜・款冬・藤・暮春・首夏・卯花・郭公・夏草・恋」の十二、歌人は、左方が朝忠・能宣・忠見・順ら七人、右方が兼盛・中務ら四人であった。歌合証本等には、中務の歌は、「桜」「首夏」及び「恋」題二首の計四首が見えるが、底本では九二番詞書に「村上御

時歌合、右方にて」として、「桜（九二番）」、「首夏（九三番）」、当該歌の三首を採り、恋歌の二首めを欠いている。これは九二～九四番歌が底本・御所本の独自歌であることや、語句の異同をも含めて、問題点である。

当該歌は、『類従歌合』二十巻本によれば、

十七番　左勝　　能宣

三四　こひしきをなににつけてかなぐさめむゆめにもみえずぬるよなければ

右　　中務

三五　きみこふるこころはそらにあまのはらかひなくてふる月日なりけり

とあり、「左歌、頗有情、仍為勝」として、中務の負けとなっている。第二句は「心はそらに」で、『金葉集』（三奏本）も同じ。『兼盛集』では、「恋」題の五首の冒頭に置かれ、第二句、第三句が異なる。

きみこふるこころのそらは天の河かひなくて行く月日なりけり

この『兼盛集』歌では、「そら」から「天の河」に続く点がやや不審である。また、中務と兼盛は同じ歌合の右方歌人であるから、中務詠が『兼盛集』に混入した可能性がある。しかし、底本が「こゝろのそらは」、となっているのは、或いは中務の手元に残された資料がその形であったか、又は『兼盛集』歌との関わりも考えられるか。と言うのも、御所本のように「心の底は」と見る場合、続く表現として「天の河」が相応しいし、「河」ならば「櫂」との掛詞も明確になる。一首全体の流れを考えるならば、「心はそらに」、すなわち「貴方を恋するわが心はいつも上の空であるのに」とするほうが適切と思われるので校訂したが、次に示すように「心の空」と続く形も古くからある点が厄介である。

秋風は身をわけてしもふかなくに人の心のそらになるらむ
（古今・恋・七八七　友則）

君をのみ思ひやりつつ神よりも心の空になりし宵かな
（拾遺・雑恋・一二四一、天暦御製）

たのみくるひとのこころのそらなればくもゐのかはにそでぞぬれぬる
（斎宮女御集・一〇四）

これらの例では「心の」の「の」は主格で、「心が空になる」又は「心が空である」の意となるが、当該歌の場合、底本でも他本でも「君恋ふる心の空は」となっていて、「の」は連体格である。敢えて底本のとおり「心の空は」を採るならば、一首の意は「貴方を恋うわが心の空は天の原であるが、（櫂無しに天の原を渡り行く日月ではないが）思う甲斐もなく時が過ぎゆくことだ」とでもなろうか。

なお、この歌合の、中務のもう一首の恋歌は、

十八番　左持　　本院侍従

三六　人しれずあふをまつまにこひしなばなににかへたるいのちとかいはん

右　　中務

三七　ことならばくもゐの月となりななむこひしきかげやそらにみゆると

で、こちらにも「空」と「月」が詠まれているのが興味深い。

九五番

村上御時、中宮の雛遊びに、七月七日、河原に女房車あり、州浜などして

たなばたも今日は逢瀬と聞くものをかはとばかりや見て帰りなん

［異同］　村上御時→なし（西・前）、雛合→たなはたのゑのひゝなあそひに（西）ひゐなのあそひに（前）、七月七日河原に→かはらのかたすはまつくれりひゝなのくるまのかた七月七日（西）つくれるくるま七月七日（前）、たなはたも→たなはたは（西・前）、かは→みつ（前）

［他出］　なし

［語釈］　○雛遊び　底本及び御所本「雛合」。「雛合」は当該歌のみで、他本は「雛遊び」であり、「雛遊び」ならば他集にも見えるため、校訂した。［補説］参照。雛は、魔よけのために幼児の傍に置いた人形で、天児・這子と呼ばれて古くからあり、祓えをして川に流したもの。平安時代には、幼児の雛遊びが盛んになり、ままごとのようにして遊んだ。小さな屋形や調度類も作られ、季節に関係なく遊戯としたことが物語類や日記などに散見するが、詳細は明確ではない。○たなばた　多くは織女を指すが、牽牛を指す例や両方を言う例もある。ここは詞書に「女房車」があることも考慮して、織女の意に解した。○かはと　「川と」と「あれはと」の意との掛詞。「おもへども人めづつみのたかければかはと見ながらえこそわたらね（古今・六五九　よみ人しらず）」。当該歌はこの歌を踏まえていよう。［補説］参照。

［通釈］　村上天皇の御時の中宮（安子）の雛遊びに、七月七日、河原に女房車がある所を、州浜などを作って

機女も今日は牽牛に逢う機会と聞くのに、この私は「あれは（あの方か）」と見るばかりで帰ってしまうのだろうか。

［補説］　底本では詞書がわかりにくい。西本願寺本では「たなばたの絵の雛遊び」とあるが、雛遊びで、「絵」のようなものを詠んだかと見られる例として、『大斎院前御集』が挙げられる。

うちにおはせし時、ひゐなあそびの、神の御もとにまうでたる女をとこまうであひて、物いひかはす

そのかみはさしもおもはでこしかどもおもふことこそことになりぬれ

女、返し

神だにもいのることだにあるものをあだしおもひやいかがなるらん

おなじひゐなやのやしろの前のかはに、もみぢちるところにて

かぜはやみかみのあたりをはらふともはやきせぜにもちるもみぢかな

（大斎院前御集・六〇～六一）

波線を付したのは、当該歌の詞書を解釈する際に参考になると思われる部分である。また、雛遊びの調度は、『源氏物語』や『枕草子』に見えるが、歌集における「雛の屋」の例が『御堂関白集』にあり、こちらにも右の傍線部と関わりそうな表現がある。

ふのとの、わかみやの御ひゝなやにさまざまの物うゑなどして、山のうへにかみのやしろあり、わらはにみてぐらもたせて、それにかかる

君が世にあまくだりける神なれば千とせの松のなかにこそいはへ

（御堂関白集・七三）

『御堂関白集』の詞書では、「雛屋」に様々な物を植えており、それも「山の上に神の社」があって、「みてぐらを持った童」まで添えられている。「社」は『大斎院前御集』にも見えており、同じ「ひゝなやの社」の前には川もある。これらの事から、『大斎院前御集』の場合も、「神の御もとに…」以下の描写は、絵というよりも「州浜」が考えられないだろうか。雛遊びに州浜のような物が用いられたとすれば、「七月七日、河原に女房車あり」も、州浜の具体的な様子と見ることができるので、

ここではそのように解しておいた。ただ、「七月七日」とあるからには、七夕の日であることを示す飾り付け（七夕に牽牛織女を祀るもの）も同じ州浜にあったのだろうか。

歌は、七夕の日に河原にいる女房の立場で、［語釈］に示した『古今集』六五九番歌の主旨（人目があるために恋人の姿を遠くから見ていることしかできない）を踏まえ、愛する人との逢瀬が叶わぬわが身を、年に一度の逢瀬を迎える織女と比べて嘆く気持ちを詠んだものと解した。

また、［語釈］で示したように、底本「雛合」を「雛遊び」に校訂している。しかしながら、当該歌の次には、

又れいけんてんの女御中宮にたてまつり給ひゝいなのもにあしてにて

白波にそひてあきはたちくらしみきはのあしもそよといふなり　（九六）

又

たなはたのこゝろやそらにかよふらんけふたちわたるあまの河きり　（九七）

の二首がある。この二首は、詞書から当該歌に続く可能性があり、九六番歌に「白波、汀」、九七番歌に「たなばた」とあることから見ても、当該歌を含めた三首（九五番～九七番）は同じ折のものと考えられる。「麗景殿女御（荘子女王）が、葦手を施した裳をつけた雛を中宮に奉った」という詞書の内容を、当該歌のそれと合わせて考えた場合、七夕の日に中宮の許で、「雛遊び」が行われたとも、凝った州浜や雛にそれぞれ歌を添えた形のものを集めた一首の「物合＝雛合」が行われたとも、考えることができるだろう。後者と見るならば「雛合」のままで良く、校訂は不要となる。

九九番

法師、深き山に居たるところ

跡絶えて入りにし日より吉野山滝の音にも人の聞こえぬ

［異同］吉野山→にし山の（西）、ふしのやま（前）

［他出］なし

［語釈］○吉野山　西本願寺本は「西山」とし、前田本は「富士の山」とする。しかし、吉野山の歌には滝を詠み込んだものを複数指摘出来るので、底本及び御所本の表記が最も適切と判断した。「よしのやまたきのしらいととぢつれどはやくしりにしこゑはわすれず（西本願寺本中務集・一四七）」。「みよし野の山よりおつるたきつせのはやくなりせばまちもしてまし（元良親王集・一四八）」。○跡絶えて　世間との交渉を断ち、ゆくえをくらまして、の意。○人の聞こえぬ　底本では「き」以下は判読しがたいが、他本に従う。また、ここは「音にも人の聞く」、すなわち人が噂に聞くの意をこめつつ「聞こえぬ」と否定したものか。或いは、滝の音はそこにありながら、人から音信が無いの意か。［補説］参照。

［通釈］法師が深い山に座しているところ

世間との交渉を断って山に入った日から、この吉野山では、滝の音はしても、人の音信は聞かれないことだ。

［補説］深山で修行する僧の絵を詠んだ歌であろう。『源氏物語』若紫巻の冒頭部に登場する「北山の聖」のような姿を想起させる。しかし、下句はいささか解しにくい。木船『注釈』は、「姿を隠して入って来て

しまった日から、吉野山は、滝の音にも、人の声は聞こえない」と訳し、「聞こえるのは、ただ滝の音だけ。塵界を遠くへだてた、静寂の境。そして孤独」と解説する。しかし、中務の歌の技巧的な傾向から見て、「滝の音にも人の聞こえぬ」は、「音に聞く」や「音に聞こゆ」、「人の聞こゆ」などが絡み合った表現のように感じられてならない。ここでは、「人の聞こえぬ」を音信が無い意に取って解釈した。ただ、「音」に「音信」や「噂」の意を掛けたと考えることが出来る用例は多くはない。

あふことは雲ゐはるかになる神の音にききつつ恋ひやわたらん
（貫之集・五五一）

あしわくる程にきにけりたつ浪のおとにききてしこやなにはがた
（和泉式部集・六六六）

中には、いささか時代は下るが、滝の音が詠まれた例もある。

会坂の関屋もいづらやましなの音羽の滝の音にききつつ
（金槐集・四六一）

絵の法師を詠んだ歌としては、次の歌が参考になろう。

ゑに、山寺ほふしのゐたる所に、きこりとかやのかへる所に
すみかぞとおもふもかなしくるしきをこりつつ人の帰る山辺に
（和泉式部集・一一五）

この和泉式部の歌は、画中の山寺法師の立場で「栖ぞと思ふもかなし」と詠んでいる。当該歌も、法師の立場でその心情を詠んだものと思われるが、「跡絶えて入りにし」あたりに、法師ではない側の、すなわち法師と別離した身内や親しかった人々の心情をも想像させるものがあり、重ねて鑑賞することが可能にも思われて来る。

一〇一番歌

旅人あり、雁なきてわたる

行くをたゝ思ひやらなん雁がねのかへる声だにきかぬ雲居を

［異同］旅人→たひゆくひと（西・前・歌）、かりなきてわたる→かりなく（西）なし（前・歌）、かりかね→かりのね（「の」右傍に「か」）（前）、かへる→かよふ（前）

［他出］なし

［語釈］○雁がねのかへる声　「帰雁」は春になり北国へ帰っていく雁を指し、「燕来　時尓成奴等　鴈之鳴者　本郷思都追　雲隠喧（万葉・巻一九・四一四四）」など早くから歌題として意識されていた。『古今集』にも「帰雁をよめる」の詞書が見られ「春霞立つを見すてて行く雁は花なき里に住みやならへる（春上・三一・伊勢）」の歌が載る。○雲居　遥かに遠く離れた場所、遠方の意。

［通釈］旅人がいる、雁が鳴いて渡る

旅立って行くのをどうか思いやってほしい。雁の帰る声さえ聞こえないほど遠い場所へ行く私を。

一〇二番歌

行く人に添ふる心のあやしくもしるべなきごと惑ひぬるかな

［異同］まとひぬる→まとはるゝ（前）、しるへなきこと→しる人なき

と（歌）

［他出］　新後拾遺集八四五

［語釈］　○行く人に添ふる心　「行く人」は旅人のこと。一〇一番歌が旅人側から詠まれた歌であるのに対し、当該歌は見送る側の立場から詠まれる。○しるべなきごと　道案内がいないかのように。「ごと」は「ごとく」と同じ。○惑ひぬるかな　『新後拾遺集』では前田家本と同様「まとはるゝかな」で採られるが、ここでは底本に従う。

［通釈］　旅立っていく人に寄り添った私の心は、道標がないかのように、おかしなまでにさ迷ってしまったことだ。

一〇三番歌

たつときく空をながめて春霞かりの別れぞかなしかりける

［異同］　たとへなく→たつときく（西・前・歌）、はるかすみ→かりかねのはるかすみ（「かりかねの」に見せ消ち）（前）、かり→かひ（「ひ」右傍に「り」）（前）、なかめ→わかれ（西・前・歌）、かなしかりける→はかなかりける（西・歌）

［他出］　なし

［語釈］　○たつときく　底本は「たとへなく」だが「春霞」との繋がりを考えれば「たつ」の方が穏当と思われるため、他本に従い「たつときく」に改めた。木船注釈では「〈たつ〉は春霞が立つ意に出発する意を重ねる」とする。「きく」は見送る側ということになろう。○かりの別れ　底本は「なかめ」であるが、当該歌以外に用例が見出せず、上句の「ながめて」とも語句が重複してしまうため、他本により「別れ」に改めた。「春になると飛び去っていく雁（旅人）との別れのように」の意。雁が毎年秋に飛来し春に帰っていくことから「仮の別れ」の意で用いられることも多い表現。

［通釈］　春霞が立ち、あなたが出立すると聞く空をしみじみ眺めている

と、あなたとの別れは一時であっても悲しいものであったことよ。

［補説］　一〇一番歌から一〇三番歌は、いずれも帰雁と旅人について詠まれており、同一の絵をもとにしたと思われる贈答形式の歌群である。なお西本願寺本・歌仙歌集本・前田家本では一〇一番歌と一〇二番歌との順序が入れ替わっており、詞書も一〇二番（西本一〇七番）歌に付されている。

一〇六番歌

荒れたる家にもみぢ見たる所

空見えて影も隠れぬふるさとはもみぢ葉さへぞとまらざりける

［異同］　あれたるいゑに→あれたるやとの（西）あれたる人のいへのうちに（歌）、もみち見たる→もみちうちにちりいりたる（西）紅葉ちり入りたる（歌）もみち、りいれる（前）、そら見えて→そら見てる（歌）そらさえて（前）、かけもかくれぬ→けにもか、れる（歌）、ふるさとは→ふるもとは（御）、もみちはさへそ→もみちさへにそ（歌）

［他出］　なし

［語釈］　○影も隠れぬ　この場合の「影」は月の光か。次のような歌が参考となる。「荒れたれば影も隠れぬ我が宿のにはのどかなる春の夜の月（古今六帖・二八四・よみ人知らず）」。○ふるさと　通常は荒れ果

てた土地や昔都のあった場所といった意で使われるが、ここでは荒れた家を指す。「ふる」は「古」と「降る」の掛詞。

［通釈］荒れてしまった家で紅葉を見ている所

空が見え、月影も隠れることなく差し入ってくる古びた家には、紅葉の葉さえ止まらず降ってくることだよ。

［補説］詞書の「もみぢ見たるところ」は、底本以外の諸本では「ちり入る」となっているが、底本のままでも解せるため校訂は行わなかった。しかし、壊れた屋根の間から紅葉が降ってくる様子を詠んだ当該歌には、「ちり入る」の方が穏当であろう。伝写過程で、「ちり入る」の「り入」が、「見」に誤写された可能性が想像される。

一〇七番歌

七夕祭

さよふけぬ今渡るらん天の河かげこそ見えね水騒ぐらし

［異同］たなはたまつり→たなはたのゑあるに（西）たなはたのゑに（歌）ゑにたなはた（前）、さよふけぬ→さよふけて（西・前・歌）、いまわたるらん→今日わたるらん（西）今わたるらし（歌）、かけこそ見えね→かけにそみえね（歌）、みつさはくらし→みつまさるらし（西・歌）

［他出］なし

［語釈］○水騒ぐらし　七夕の日、牽牛と織女が逢うために天の河を渡り、そのために水が騒ぐという表現は「天河　浮津之浪音　佐和久奈里　吾待君思　舟出為良之母（巻八・一五二一）」など、『万葉集』から見える。

［通釈］七夕祭

夜が更けた。今牽牛は天の河を渡っているのだろうか。その渡る姿こそ見えないが、水が音をたてているらしい。

一〇八番歌

村上御時に入れ文字の歌おほせにて上には滝下には泡を入れさせ給ふに

世々をへて落ちくる滝の白糸にぬける玉とは泡やなるらん

［異同］いれもしの哥おほせにて→又みやのおほせことありて（前）れいも、しのおほせことありて（西）いれもしのおほせことありて（歌）、かみにはたきしもにはあはをいれさせ給に→上たいきといふ又みやありやというといれさせたまふ（前）きよたきのといふもしありやといふといれさせ給ふ（西）上たきといふしもありといふことをいれさせ給て（歌）、しらいとに→しらいとは（歌）、なるらん→みゆらん（前）みるらん（西・歌）

［他出］なし

［語釈］○入れ文字　同様の他例を確認することができない。一〇八番歌の内容から、歌の中に指示された語句を挿入して詠む技法か。木船『注釈』では、特定の文字を読み込んだ歌としている。ここでは、上句に「滝」、下句に「泡」を入れた歌のことである。○滝　滝を素材にした歌は、平安期に入ると、水を糸、しぶきを白玉にたとえるものが増える。「流れくる滝の糸こそ弱からしぬけど乱れて落つる白玉（拾遺・雑上・四四八　貫之）」等。右記のように「繰る」など「糸」の縁語を織

り込むものも多く、当該歌第二句もそのような趣向を狙ったものと考えられる。同様の趣向の中務歌として「君がくる宿にたえせぬ滝の糸はへて見まほしき物にぞ有ける（拾遺・雑上・四四六）」が挙げられる。

○泡　右記のように、しぶきを「白玉」とする歌は多いが、滝の泡を「玉」とたとえる歌はさほど多くない。「みよしののよしののたきにうかびいづるあわをかたまのきゆと見つらむ（古今・物名・四三一　友則）」「はるくればたきのしらいといかなれやむすべどもなほあはに見ゆらん（拾遺・雑春・一〇〇四　貫之）」といったものが挙げられる。○なるらん　西本願寺本・歌仙歌集本に「みるらん」、前田家本に「みゆらん」。「泡」を「玉」と見立てるのだから、和歌表現としては、右の歌のように「みゆらん」とするものが自然であると考えられるが、底本を尊重する立場から、改訂は行わなかった。

［通釈］　村上の御時に入れ文字の歌を仰せつけになり、上の句には滝、下の句には泡という文字を入れさせなさるのに

世々を経て落ちてくる滝の白糸に貫かれる玉と、泡はなるのだろうか。

一〇九番歌

又

つきもせず落ちくる滝の白糸は結びし泡や数はそふらん

［異同］　西本願寺本には当該歌なし。白糸は→白糸も（歌）、そふらん→しるらん（前・歌）

［他出］　なし

［語釈］　○そふ　増える、重ねるといった意で、同時代の和歌における用例は多くない。「万代に千とせをそへてみつるかな岩ほながらにひける小松を（元輔集・四〇）」など。「数そふ」は、後代では祝意の表現として多く用いられる

［通釈］　又

尽きることもなく落ちてくる滝の白糸は、結んだ泡の数を増しているのでしょうか。

［補説］　一〇八・一〇九番歌は、一〇九番歌の「又」という詞書と歌意から、ひとまとまりのものと考えられる。なお、一〇八番歌の詞書は諸本で大きく異なる。底本は「村上御時に入れ文字の歌おほせにて、上には滝下には泡を入れさせ給ふに」、前田家本は「村上御時に又宮のおほせごとありて、上たいきといふ又宮ありやというと入れさせ給ふ」、西本願寺本は「村上御時にれいももじのおほせごとありて、きよたきのといふ文字ありやといふと入れさせ給ふ」、歌仙歌集本は「村上御時に入れ文字のおほせごとありて、上たきといふしもありといふことをいれあっせ給ひて」となっている一〇八・一〇九番歌ともに上の句に「滝」、下の句に「泡」を詠み込んでおり、底本以外を取ると歌との整合性に欠けるため、底本の詞書が妥当なものと考えられる。

一一〇番歌

竹を

雪多み枝はなびけどくれたけの下に変はらぬよこそみえけれ

［異同］　たけを→をなし（前）　おほみ→おもみ（前・西・歌）　えたは

→えたに（西）　した→しも（歌）　かはらぬ→かよはぬ（前・西）　よ→夜（西）　みえけり→みえけれ（前・西）　みえける（歌）

［他出］　なし

［語釈］　○ゆきおほみ　他本は「ゆきおもみ」。「ゆきおほみ」の用例はほとんどない。「ゆきおもみ」も同時代にはほとんど用例は見られないが、「雪おもみしだれるみさの枝なればさはるをがさにしぐれおつなり（夫木・七二〇〇　俊頼）のように、時代が下ると見られるようになる。当該歌は「ゆきおほみ」のままでも意味が通るので底本のままとする。○なびく　風、水などの力により、それに流されるような形になること。このような意味の「なびく」を用いる和歌では「雲」「煙」「風」などを伴うことが多く、雪により枝がなびくという例は同時代には見られない。また「なびく」には、人の意に従うといった意味もあり、それを掛けた例も見いだせる（「たまさかにいひなびけたるくれたけのふしどころなきことのわりなさ（重家集・五五一）」）。こういった趣向を意識したものか。○くれたけの　「ももしきの花のにほひはくれたけのよよにもにずとときくはまことか（伊勢集・二二七）」などがある。時代が下ると「みどりにていろもかはらぬくれたけのよのながきをや秋としるらん」など、祝意を込めたものが見られる。当該歌も、「かはらぬよ」を導き、祝意をくみ取ることができる。○変はらぬよ　西本願寺本に「夜」とあるが、雪の「下」に見えるものを歌っていることから、呉竹の「節」を当てるのが妥当と考えられる。また、「世」を掛けているものと考え得る。○みえけり　係り結びの関係が妥当するので、前田家本・西本願寺本により「みえけれ」に改めた。

［通釈］　竹を

雪が多いので、枝はなびいているけれど、呉竹の（雪の）下には変わらない節が見えるように、変わらない世の中が見えることよ。

［補説］　当該歌は、詠歌の状況を限定できない。一〇九番歌を見ると、「つきもせず」「数はそふ」といった、祝意を読み取れる句が用いられている。一一〇番歌もその流れに沿うものと考えると「変はらぬよ」を「世の中」と取ることができる。その一方で、第二句にある「なびく」という語は、男女の仲で多く用いられている語彙であり、当該歌も男女の仲を想定している可能性も考えられる。ここでは、祝意を意識した通釈とした。

高野　晴代（日本女子大学教授）
高野瀬恵子（都留文科大学非常勤講師）
森田　直美（国文学研究資料館機関研究員）
時田　麻子（日本女子大学大学院博士課程前期修了）
曾和由記子（同博士課程前期在学）
佐藤　千恵（同博士課程前期在学）
武藤　菜海（同博士課程前期在学）
青木茉莉絵（同博士課程前期在学）